2006 年度

GNC 活動報告

平成 19 年 3 月

GNC
Japan
Global Network for Coexistence

2006 年度春季エコツアー概要報告

＜モンゴル GNC のオフィス訪問＞ 5 月 14 日

GNC のモンゴルオフィスをはじめて訪ねました。昨年の秋にオープンし、今では諸々の機材もそろい、ネット環境も整い、とても仕事のしやすいオフィスです。場所はロシア大使館の目の前で、誰もが立ち寄りやすい便利なところです。今回のツアー中も、様々な打ち合わせ、事務作業をするのに大いに役立ちました。

（左）モンゴル GNC オフィスの外観 （右）オフィス内のケイジバン

モンゴル GNC のスタッフは、モンゴル代表のツォゴさん、事務局のトゥプシンさん、ノヨさん、ナスカさん（現在日本在住）、専門家のアムガさんからなり、一騎当千の頼りになるメンバーです。今回のエコツアーの下準備を、日本人スタッフが何もすることが無いほど見事にしてくれました。今後このオフィスが、GNC に関わったモンゴルの方々のネットワーク拠点となり、ここから新たに様々なプロジェクトがスタートすることを願っています。

（左写真） 集合写真：奥から モンゴル代表 ツォゴさん、ノヨさん、トゥプシンさん、アムガさん
（左中央）ノヨさん （右中央）トゥプシンさん （右）アムガさん

＜モデル農場でのエコ教室（第 23 学校・第 108 学校参加）＞ 5 月 15 日

参加者
GNC日本スタッフ 3 名（講師 大西 郁氏 含む）
GNC モンゴルスタッフ 3 名
第 23 学校 生徒 16 名、同行教師 3 名
第 108 学校 生徒 31 名 同行教師 3 名

今回も、恒例となった「エコ教室」を GNC モデル農場で行いました。 今回は参加校として、昨年の第 108 学校に加え、第 23 学校が加わりました。実は、第 23 学校は、モンゴル GNC のスタッフ、ナスカさん、トゥプシンさんの母校でもあります。第 23 学校の生徒 16 名、第 108 学校の生徒 31 名、そして同行した先生もあわせれば総勢 53 名が農場を訪れました。全員日本語クラスの生徒なので、まずは一人ひとり順に日本語で簡単に自己紹介をしました。笑いが絶えず、リラックスしたムードでエコ教室がスタートしました。

内容は、プログラム順に並べると以下の通りです。

1. GNCの活動紹介（宮木いっぺい・矢野明子）
2. 特別授業「身近な環境を守ること」（大西 郁）

3. アニメ「木を植えた男」鑑賞
4. 全員でラジオ体操
5. 苗畑での実習（マツの植樹）
6. 全員で日本の歌（「今日の日はさようなら」）の合唱

大西さんの授業は昨年に引き続き同じテーマで、今やウランバートルを中心に広がっているゴミ問題の深刻さ、重要性が生徒たちにかなり浸透してきた印象を受けました。またアニメ「木を植えた男」は、昨年と違ってモンゴル語吹き替え版（GNC の事業として作成しました。）での上映で、作品のメッセージがより一層ダイレクトに生徒たちの心に届いたようです。

（左）大西氏の授業　（中央）授業を受けている生徒　（右）ラジオ体操の風景

終了後の感想文には「感動しました」との声が多く書かれていました。また、都会育ちの両校の生徒たちにとって、炎天下の苗畑で泥だらけになって植樹したことは、新鮮な体験でとても楽しかったようです。ビデオムービーのレンズを向けると口をそろえて日本語で「楽しいー」と叫んでくれました。

（左、中央）植樹風景　（右）集合写真

今後も、GNC のエコツアーの核となる活動として継続してゆきたいと思います。また、できるかぎり多くの学校にこの取組を広げてゆきたいと考えています。ただし、参加校が増えた場合、限られた時間とマンパワーの中でどう対処してゆけばよいかが今後の課題です。

（左）23 学校の生徒　（右）108 学校の生徒

＜第108学校訪問＞ 5 月 16 日

昨年に引き続き、第108学校を訪れました。昨年の話し合いで提案され、その後スタートした GNC との共同プロジェクト（温室作り）の進捗状況について報告を受け、現場を視察し、今後のプランについて打ち合わせをしました。昨年 5 月に第 108 学校の生徒や GNC メンバーが一緒になってゴミ拾いをした場所が、温室建設用の敷

地として整備されていました。温室が完成したあかつきには、第108学校の環境教育プログラムにとって重要な舞台となることが期待されます。（第 108 学校は環境教育に関する様々な教育プログラムを創立当初から実施し続けています。）

（左）第 108 学校　（中央、右）温室予定地

＜モンゴル国立音楽舞踊学校訪問＞ 5 月 16 日

モンゴル国立音楽舞踊学校（生徒 830 人、教師 160 人）をはじめて訪問しました。ナランフー学長は、昔ロシアに留学しトランペットをおさめた方で、とても気さくな方でした。今回は、これからスタートする GNC との共同プロジェクトについて打ち合わせを行いました。ナランフー学長の希望は、表通りに面した音楽舞踊学校のキャンパスに植樹し、昨年オープンしたモンゴル国立大学エコロジー教育センターのエコ植物園のようにしたいというものでした。

（左）トランペットを吹くナランフー学長　（右）キャンパス

芸術関連の学校とのコラボレーションは GNC にとってはじめてで、今後がとても楽しみです。新しいネットワークができることはそれ自体喜びですが、それに加え、持続可能な地域づくり、まちづくりの大切さを、芸術関連の場所から発信することの意義は大きいと考えます。なぜなら幅広い層へ向けての理屈抜きのメッセージ力を期待できるからです。今回のうれしいサプライズは、学生たちが、訪れた GNC のメンバーのためだけにミニコンサートを開いてくれたことです。馬頭琴、声楽、室内楽、バレエ、伝統的な踊りなど多彩な内容で大いに楽しみました。とりわけ最初の馬頭琴演奏は母らくだからはぐれた仔らくだの悲しさと不安を描写した曲でスタッフ一同涙がでるほど（涙を流して！）感動しました。

（左、中央、右）ミニコンサートの様子

ミニコンサートの後、将来の音楽家の卵と一緒になって、最初の 10 本（マツ）をキャンパスに記念植樹しました。このメンバーの中から将来の大音楽家が生まれたらとても楽しい思いをするだろうと思います。終了後は、

GNC の専門スタッフのアムガさん（モンゴル）と大西さん（日本）が中心になって、音楽舞踊学校のキャンパスの図表を前に今後の具体的な植樹プランについて詳細な検討作業にはいりました。

（左、中央）植樹方法　（右）生徒の集合写真

＜バヤンチャンドマン村訪問＞5 月 17 日

トゥブ県バヤンチャンドマン村をはじめて訪れました。今回の目的は、バヤンチャンドマン村、GNC 共同の苗畑造成プロジェクトについて打ち合わせをし、予定地の視察をすることでした。詳細につきましては、以下に記しておきます。

バヤンチャンドマン村苗畑造成プロジェクト

＜意義＞
現在モンゴル国において植林、緑化の重要性が広く認識されはじめていますが、一方でそれを利用して自らの利益追求のために供給量と価格をコントロールする苗木会社が多くなっています。そのため植樹のための苗木を安価に安定的に入手することが以前にくらべ困難になりました。そこで森林再生、緑化を推進してゆくためにGNC 自身で安価で安定的な苗木供給システムを構築する必要があると考えました。

＜造成地選定理由＞
専門スタッフの調査にもとづき、ウランバートルからさほど遠くなく、かつ苗畑に適した土、環境を有し、何より自治体および地元住民ボランティアの全面的な協力が得られる場所としてトゥブ県バヤンチャンドマン村を選びました。当地には小中高の学校、および農業大学（旧ソ連時代に創られた農業専門短期大学。もとは 800 人の学生がいたが、現在は 150 人に減ってしまった。）もあり、教育啓蒙、学生とのコラボレーションの可能性が高いことも好材料でした。

＜事業内容＞
村内中心部の温室で、カラマツ、アカマツ、ニレ等を種から栽培し、くろうめのどき 5000 本、野生黒葡萄 5000 本を挿し木栽培すること、および、村郊外（地名：ブルハンティンアム）の2ヘクタールの土地を苗畑に造成し、カラマツとアカマツを育てること、以上の2つがプロジェクトの具体的な柱です。そのため常駐の技術者と臨時の作業員を雇用する予定です。また、村内でビデオを上映し、勉強会を開催することを通して地元住民とともに緑化の大切さを考え、長期的な協力関係を構築したいと考えています。

バヤンチャンドマン村は、ウランバートル市から西北 72 キロ（車で 2 時間弱）に位置し、890 戸 3500 人からなる村です。890 戸のうち 500 戸は貧困に苦しんでいるとのことでした。全部で 28000 頭の家畜がいますが、他の村に比べると少なく、経済基盤として、家畜ではなく農業（主にジャガイモ、カブ、にんじん）に頼っている村です。村長は、就任して 1 年（任期 4 年）のガンボルト氏、とても気さくで豪快な方でした。大学では数学を勉強していたとのことです。

（左）バヤンチャンドマン村の全景　（中央）ガンボルト村長　（右）集合写真

まず村長室で今後のプランについて話し合いを行い、その後、苗畑造成予定地を視察しました。予定地の場所は、GNC の専門スタッフのアムガさんが事前に諸条件を考慮して選定しておいてくれました。村から郊外に 30 分ほどいったところにあり、周囲が自然のポプラに囲まれ風よけになっていて、土質もよく、苗畑造成に適していました。雲ひとつない青空のもと造成予定地にシートを敷いて、ガンボルド村長や村の方々も含め、皆でピクニック気分で昼ごはんを食べました。バヤンチャンドマン村とのコラボレーションの記念すべきスタートの宴（？）となりました。

（左）打合せの様子　（中央）苗畑造成予定地　（右）ピクニック気分の昼ごはん

【大西氏からの専門的所見】

５月１７日（バヤンチャンドマン村）

1.元々森林地帯であった事（森林脇）、以前は中国人によるジャガイモ畑であった事から、苗畑に適する土地であるように思えます。
2.土壌もさわった感触はとても弾力があり、砂壌土ではない保水性・通気性のあるように感じました。圃場予定地も三方が森林に囲まれ、風の通り道でないことは活着前（定着前）の幼苗木にとっては非常に良い条件であります。

今後の苗畑農場への提案

1. 作（幼苗木の列）は斜面（高低差）に対して、横に作った方が良いと思います。元々乾燥地帯なので、斜面（高低差）に対して縦に作ると水や土壌が流れてしまい、　物理的条件は悪くなります。横に作ることで水や土壌を流さないようにします。
2. 地下水を利用して灌水をする場合は、汲み上げ直後の水温は冷たいので、半日くらい陽に当てて水に熱を持たせる方が良いと思います。また、高温下での灌水はその後土壌に熱を含ませ、苗木を高温多湿条件にしてしますので、陽が傾いてから行なう方が良いと思います。
3. ホースの口にはシャワーヘッドを必ず付けた方が良いでしょう。無駄な灌水量を　防ぐ事と、土壌を撹拌し根を傷つけることを防ぎます。
4. 周辺には放牧の牛や馬などの家畜がいることから、苗畑の周囲には柵を設け、家畜の侵入を防いだ方が良いと思います。食害の恐れが予想されます。

＜モンゴル国立大学エコロジー教育センター訪問＞ 5 月 16 日&5 月 18 日
—セミナー ＆ 植物園での記念植樹—

モンゴル国立大学エコロジー教育センターは、自然環境分野の優れた専門家を早期から育成するため、全国から選抜された高校生の集まる教育機関です。先ごろ、昨年までセンター長だったバザルドルジ先生が退任しモンゴル国立大学の名誉教授になり、ツォグバダラフ教授が後任のセンター長に就任しました。ツォグバダラフ教授とは今回が初対面でしたが、バザルドルジ先生も交え大変フレンドリーにお話ができ、今後も GNC との共同プロジェクトのエコ植物園事業をさらに充実させることはもちろん、セミナーをはじめさまざまな取組においてコラボレーションしてゆくことを確認しました。また、センター長がかわるのに伴い、現場の担当者の顔ぶれも新しくなりました。担当者の名前は、デジッドマーさん（女性）、オットゴンサイハンさん（女性）、エンクバイヤーさん（男性）の若い 3 人です。

左：エンクバイヤーさん　左から三番目：ツォグバダラフ教授
右から：デジッドマーさん、オットゴンサイハンさん

今年は、学生の参加しない専門家だけのセミナーを開き、その後、エコ植物園で記念植樹を行いました。セミナーでは、以下の4つの報告、すなわち

1.「日本とモンゴルの自然環境」
（バザルドルジ　モンゴル国立大学名誉教授、モンゴル国立大学エコロジー教育センター前センター長）
2.「大気汚染の森林に与える影響」（バータルビリグ教授　モンゴル国立大学森林学部長）
3.「ミコリズ（きのこ）を使った植林」（ジオエコロジー研究所員、GNC スタッフ　アムガさん）
4.「淡路景観園芸学校の紹介」（GNC スタッフ　大西郁さん）

がなされました。大西さんの景観に関する話は、これからの都市デザインのあり方を問い直す内容でした。具体的には、行き当たりばったりで建物や施設や公園などを配置するのでもなく、アーティスティックな個人的趣味に偏って配置するのでもなく、まず第一に、そこに暮らす人々の居心地の良さを合理的に考え抜いたうえで都市デザインを行うことの重要性を説明したものでした。参加メンバー全員の関心を大いに集め、今後のまちづくりに是非生かしてゆこうという話になりました。

（左、中央、右）セミナーの光景

その後、皆で楽しく昼食をとった後、新旧のセンター長も含め、スタッフ一同で記念植樹を行いました

（左、中央、右）記念植樹の光景

【大西氏からの専門的所見】

植物園への提案
枯死した枝葉はもちろん、地面に対して垂直に伸びた枝（光合成しにくい）、樹木の内部に生長した枝（（光合成しにくい）は剪定したほうが良いでしょう。これらがあることで樹木自身に負担をかけてしまい、健康状態を悪くしてしまう可能性があります。

植物園や公園の設計計画に関わる基本的なことをあげます。

1. 比較的長い距離の直線を作るときは、歩く目線を散らす為の工夫や、目線の先にアイストップになるアイテム（植物・花壇・オブジェ等）を設置すると良いでしょう。
2. 広い場所を歩かせる時は、断片的にでも仕切りになるようなものを配置すると良いでしょう。お互いの流れ（交差）を妨げることを防ぎます。
3. 交差点になる場所の中央には、人の流れを分ける為に、アイテム（植物・花壇・オブジェ等）を設置するのが良いでしょう。
4. 直線的に歩く道に平行する道（動線）は、直線的ではなくクランクやスラローム状にしたりして、遊びを持たせます。
5. .公園や植物園は「何の為にあるのか？」「どう過ごすのか？」ということを充分に考え、遊び心や誘惑するような仕掛けを作り事が良いでしょう。

＜全体交流パーティー＞ 5 月 19 日　レストラン MARAL TAVERN にて

今回もいつもと同様、ツアー期間中に出会った全ての方々を最終日のパーティーにご招待しました。幸い、ほとんど全ての方々、そして第 23 学校と第 108 学校の生徒も大勢駆けつけてくれました。いつものように途中、モンゴルの歌と日本の歌の歌合戦で盛り上がり、全員で大声を張り上げました。また、恒例となりましたが、ツアー中に撮影した写真のスライドショウを行い、お世話になった皆様の紹介も行いました。このパーティーが、これまで GNC と 1 対1で関わっていたモンゴルの方々同士が横のネットワークを築いてゆくためのきっかけになればと思っています。最後は、それぞれの国の言葉で「幸せなら手をたたこう！」を振り付けつきで歌いました。また 9 月のツアーで再会できることが楽しみです。

2006 年度　秋季エコツアー概要報告

ツアー実施日程:　2006 年 9 月 9 日—9 月 16 日
GNC 日本スタッフ:
宮木いっぺい（代表）、矢野明子（事務局）、松橋希世貴（専門スタッフ）、尾上崇（専門スタッフ）
GNC モンゴルスタッフ:
ツォゴ（モンゴル代表）、トゥプシン（事務局）、ノヨ（事務局）、アムガ（専門スタッフ）
同行通訳:タミル

第 18 学校　訪問（9 月 11 日）
・第 5 回エコ教室開催
・アニメ 「木を植えた男」（モンゴル語版）上映
・「日本の公園」プレゼンテーション

第 18 学校の日本語クラス、英語クラスの 10 年生、11 年生（15、16、17 歳）43 人の前で、日本の公園事情について写真を見せながら紹介、説明しました。来年度から、GNCと第 18 学校の新しいプロジェクトとして、花壇作り＆教室内でのプランター栽培を行う予定なので、そのための準備ともなりました。
また、アニメ「木を植えた男」（モンゴル語版～GNC作成）を上映しました。終了後、全員に感想を書いてもらいました。「わたしのきもちはむねがいっぱいです。このはなしはとてもたのしかったです。かんきょうについてたくさんのものをしりました。どうもありがとうございます。（ツェレンハムさん 16 歳）」

（左）日本語クラスの生徒が着物姿で迎えてくれました　（右））日本語クラス、英語クラスの 10 年生、11 年生

（左）「木を植えた男」に見入る生徒たち　（右）全員で記念撮影

第 108 学校　訪問（9 月 11 日）
・歓迎演奏会
・温室視察

第 108 学校を訪れ、GNCと第 108 学校で進めているプロジェクト（環境教育用温室作り）について打ち合わせをしました。その後、建造中の温室を視察しました。
また、第 108 学校の音楽の先生方がモンゴル音楽の演奏会を開いてくださいました。GNCのメンバー以外に、第 108 学校の 1 年生の子供たちも一緒で大いに盛り上がりました。

（左）先生方の演奏に手をたたく 1 年生　（中央）国内のコンクールで優勝した 2 年生の男の子が歌いました
（右）演奏してくださった先生方と記念撮影

（左）建造中の温室
（右）環境教育を担当する先生方
左からトヤー先生、トゥール先生、ウンドラフゲレル先生、アンフザヤー先生、ミャグマルスレン先生

バヤンチャンドマン村　訪問（9 月 12 日）

・新 GNC 苗畑として検討開始

5 月に引き続き、今回もバヤンチャンドマン村を訪問し、バヤンチャンドマン村における GNC 苗畑事業について話し合いを行いました。

第一期の事業期間は 2007 年～2009 年。村内の温室と、村郊外（ブルハンティンアム）の2ヘクタールの苗畑にて、ポプラ、アカマツなどの苗木栽培を行い、公園作り　街路樹植樹　校内緑化事業支援に利用する予定です。あとは、果樹の苗を栽培し、ゲル地区の緑化支援を行うこと、エコ植物園の学術的に価値のある原生植物のバックアップ用苗の育苗を行うこと、などを予定しています。また、将来的には　苗木販売で現地活動資金源となることを目指しています。

村役場の前で

森林動物センター（スフバートル市）　訪問（9 月 12 日）

・アニメ 「木を植えた男」（モンゴル語版）上映

トジンナルスでの森林再生事業を行っている森林動物センターで、アニメ 「木を植えた男」（モンゴル語版）の上映会を行いました。今後、GNCがトジンナルスで森林再生事業を地元住民と行ってゆくうえで、木を植えることの大切さにつ

いて共通の認識を持つことが何より重要です。アニメ 「木を植えた男」はもっともシンプルな形でそのメッセージを伝えることができると考えています。今回上映会に集まってくれたのは、5 月に、森林動物センターのスタッフとともにGNCの植林地に植林してくれた地元の学生たちでした。

（左）「木を植えた男」上映 （中央）上映会に集まった地元の学生たち （右）全員で記念撮影

セレンゲ県スフバートル近郊 トジンナルスでの森林再生事業（9 月 13 日）

GNC 植林地視察

植林

2004 年、2005 年、2006 年にGNCが植林を行った植林地を視察し、活着率をチェックしました。春植えはほぼ 100 パーセントの活着率ですが、秋植えはあまり思わしくありませんでした。今後は、記念植樹などをのぞいては、専ら春に植林を行う予定です。また、愛・地球博 モンゴル国際植樹祭（2004 年秋）での記念植林地は、秋植えであるうえに、主要道路に面しているので家畜も入りやすく、今後、メンテナンスにより一層注力する必要があります。今回はじめての試みとして、定点観測を行いました。このような記録についても充実させていく方針です。

今回は、GNCのスタッフ以外に、モンゴル国立大学で森林について勉強している学生 2 人（アルタンゲレル君、ウラントゥヤさん）、第 108 学校の生徒 2 人（9 年生 15 歳、トゥプシンバヤル君、ウランゴーさん）がセレンゲ県への 2 泊 3 日のツアーに参加しました。現地のボランティア、森林動物センターの専門スタッフとともに、アカマツ 1000 本を 2 人一組で植えました。

（左）左から、トゥプシンバヤル君、ウランゴーさん、ウラントゥヤさん、アルタンゲレル君。皆緊張しています。
（右）出発前のガイダンス

（左）全部で 1000 本植えました。 （中央）無数に飛んでいる虫に四苦八苦。

（左）2 人一組で植林します。（右）作業を終えて

（左）これまで植えた植林地を順番に視察。看板付近で定点観測を行いました。
（右）春植えのアカマツは 100 パーセントの活着率。これは 2004 年に植えたもの。

モンゴル国立音楽舞踊学校　訪問（9 月 14 日）

・音楽リズム庭園造園事業打ち合わせ
・アカマツ　樅の木　記念植樹

5 月訪問時に引き続き、ナランフー学長と音楽リズム庭園造園事業について話し合い、2007 年から 2009 年の事業として具体的なプラン作りを行いました。予算との兼ね合いになりますが、野外ステージや噴水を造り、完成後は野外コンサートを開催しようという魅力的なプランも盛り込まれました。

その後、庭園造園予定地で、低学年の生徒たちとアカマツ、樅の木の記念植樹を行いました。

（左）アカマツ、樅の木を植樹　（中央）植樹する低学年の生徒たち　（右）全員で記念撮影

モンゴル国立大学エコロジー教育センター　訪問（9 月 15 日）

・セミナー
・アニメ 「木を植えた男」（モンゴル語版）上映

モンゴル国立大学で環境や森林について勉強している学生たち約 50 人の前で、尾上崇氏（GNC専門スタッフ、元青年海外協力隊員、元モンゴル国立大学講師）が、モンゴルの森林について、自らの調査結果をもとにレクチャーしました。「なぜ日本人がモンゴルに来て植林をしているのか、その意味を考えてみてください」という最後の問いかけは聴いている学生に強い印象を残したようです。前センター長のバザルドルジ先生、現センター長のツォグバダラフ先生、その他のス

タッフも同席し、議論に参加しました。
　その後、アニメ「木を植えた男」（モンゴル語版）を上映し、最後に全員に感想を書いてもらいました。
　また、協働事業が継続中のエコ植物園を散策しました。今後の予定としては、以下の 3 点を考えています。①引き続き原生植物の収集＆植樹をする。②温室を利用し、鉢植えなどの直売を検討。安定した植物園維持費獲得目指す。③モンゴリナラ記念林の実現を目指す。

（左）エコ植物園の入り口　（中央）園内案内図を作成中　（右）一本一本に名札がついています

（左）休憩所　（中央）園内でくつろぐ学生　（右）セミナーに集中するモンゴル国立大学生たち

（左）モンゴルの森林についてレクチャーする尾上氏　（中央）「木を植えた男」上映　（右）全員で記念撮影

全体交流パーティー（9 月 15 日）
　・ビシレルトホテルにて全体交流会

　今回も、ツアー最後の晩にパーティーを開催し、ツアー中お会いした皆様をご招待しました。第 18 学校、第 108 学校、モンゴル国立大学エコロジー教育センター、モンゴル国立大学、モンゴル国立音楽舞踊学校の先生、学生、職員が大勢集まりました。いつものように、ツアー中に撮影した写真のスライドショー、各学校の挨拶と歌、楽器演奏、全員での合唱、踊りなどで楽しい時間を過ごしました。
　このような機会に GNC を媒介として、各団体がモンゴルの国づくり、地域づくりのために、ゆるやかにつながること（横の連携）を何より願っていますし、それは実現しつつあります。

（左）第 108 学校の音楽の先生方の生演奏　（中央）第 18 学校の生徒たちと

（左）モンゴル国立音楽舞踊学校の生徒たちと　（右）記念撮影　（全員はいりませんでした）

ハワリンバヤル 2006

2006 年 5 月 3, 4 日、練馬区の都立光ヶ丘公園にて、ハワリンバヤル 2006 が開催されました。GNCは、2001 年から協力団体としてハワリンバヤルに関わってきました。今年は「大モンゴル建国 800 周年」・「日本におけるモンゴル年」記念行事として開催され、来場者は過去最高 5 万人に達し、天気にも恵まれ、大盛況のもとに幕を閉じました。

展示の準備

今回のハワリンバヤルでGNCは活動の内容を皆さんにお知らせするために、展示を行いました。その準備風景です。毎年、風が強いので、今年もその対策をしっかりとしました。

初めての募金活動

今回、GNCは、募金活動を初めて行いました。その結果、43013　円集まりました（ご協力、どうもありがとうござ

いました）。このお金は、火災により多くの森林を失った、モンゴル国セレンゲ県トジンナルスの森林再生のために用います。今回のお金は、約 8600 本の苗木になります。

ボランティアスタッフの皆さん

日本人だけでなく、多くのモンゴル人の方々もボランティアスタッフとして、大活躍してくれました。

訪問客　GNCの展示ブースに、たくさんの方々が訪問してくれました。

（左）駐日モンゴル国臨時代理大使　レンツェンドー・ジグジッド氏もGNCの展示をご覧になりました。
（中央）前留学生会代表　デミチッグさんとご家族
（右）　左から 2 番目：バダムさん　一番右：元在日モンゴル留学生会代表　ナスカさん

ステージフィナーレ　モンゴル力士がステージに勢ぞろい！！

第7回 NGO 合同研究＆活動報告会

3 月 10 日、毎年恒例となりました他団体との『合同研究＆活動報告会』が 東京都台東区の法政大学地域研究センター台東サテライトオフィスにて 開催されました。今回、報告を行ったのは、内モンゴル沙漠化防止植林の会、砂漠緑化団体地球緑化クラブ、そして GNC の計 3 団体です。基調講演は、東京大学のエルデニ氏と GNC の尾上崇氏が行いました。司会は昨年に引き続き鬼木尚子さんが担当しました。

【プログラム】
1. 開会挨拶・参加者自己紹介
2. 基調講演1 （講演者：エルデニ氏）
   基調講演2 （講演者：尾上崇氏）
3. 各団体報告（以下参照）＆質疑応答
4. 意見交換
5. 閉会挨拶

開催日時：2007 年 3 月 10 日（土）13：30～17：30
会場：法政大学地域研究センター　台東サテライトオフィス
所在地：東京都台東区台東 1－32－6　小島ビル 2F　　TEL：03-3839-8541
（詳細は、http://www.hosei-hurin.net/free/GP/taito_office.html 参照。）
参加団体：内モンゴル沙漠化防止植林の会，GNC，砂漠緑化団体地球緑化クラブ

【基調講演】
基調講演1
「衛星データを用いた中国内モンゴル及びその周辺地域の土地被覆変動解析」
講演者：エルデニ（Erden）氏
内モンゴル自治区オルドス市出身
東京大学農学生命科学研究科、森林理水及び砂防工学研究室　博士一年生

基調講演2
「モンゴルの森林生態の概況　～モンゴルの森林生態の概況、森林後退要因についての考察、在来樹種の生育特性からみた人工林造成の可能性～」
講演者：尾上　崇（おのえ　たかし）氏
愛媛大学農学部森林資源学科卒
JICA青年海外協力隊モンゴル隊員（'99-'01）、現職：某大手コンサル会社環境部門、技術士補（森林部門）、GNC専門スタッフ
専門分野：亜寒帯林の森林生態

【各団体報告】

GNC （発表者：宮木 いっぺい氏）

活動地：モンゴル国　http://www.kyouzon-gnc.com
(テーマ) **GNC モンゴル発足！（持続可能なモンゴル国を担う人づくりとネットワーク）**

ここ数年 GNC は、持続可能なモンゴル国を担ってゆく人材の育成やそれにつながるような活動を総合的に行っています。「一緒に学ぶ」ことを通じて、「一緒に課題を発見し、分析し、解決策を導き出す。」これが今の GNC の活動です。「一緒に学ぶ」パートナーは様々ですが、とりわけ、ネットワークのリーダーとなる学生と志ある若い企業家に期待しています。2006年は、モンゴル人のパートナーが集まって、GNC のモンゴル支部である「GNC モンゴル」が発足し自立した活動をスタートさせました。今回の報告では GNC モンゴルの紹介を含め、GNC の2006年の活動を振り返り、その上で今後の展望についてお話しします。

砂漠緑化団体 地球緑化クラブ （発表者：原 鋭次郎氏）

活動地：中国内モンゴル自治区クブチ沙漠
E-Mail:office@ryokukaclub.com　http://www.ryokukaclub.com
(テーマ1) **牧民たちが動きだした！**

私たちの頼りなさからか(？) 牧民たちが自ら動き始めました。自ら沙柳の販売先を見つけ、刈り取り、加工し、販売しました。今後の潅木での緑化に弾みがつきそうです。
(テーマ2)**奥へ奥へ！！**
昨年15haの草方格つくったことで、東西約2キロの砂丘の入り口(活動地内の北側)の緑化の目処がたちました。今後は活動地を奥へ奥へと広げていきます。
(テーマ3)**新天地開拓！？**
助成金や共同プロジェクトの増加により、現在の活動地が手狭になってきました。今後は新しい活動地への取り組みを考えています。

内モンゴル沙漠化防止植林の会 （発表者：B. セルゲレン氏）

活動地：中国内モンゴル自治区ホルチン沙地
E-Mail:shokurin389@r3.dion.ne.jp
http://www2.neweb.ne.jp/wd/sergelen/desert.html
（テーマ） **草原の砂漠化と草原法の関係性**
内モンゴル自治区の草原保護が抱える問題点について

【会場の様子】

今回は、昨年、モンゴルの春祭りイベント「ハワリンバヤル」で GNC のブースに偶然立ち寄ってくれた早稲田大学 1 年生（女子）や、東京医科歯科大学、順天堂大学に留学している中国人なども参加しました。

【今回の報告会の所感】代表　宮木いっぺい

今回は、僕が日頃働いている法政大学地域研究センター　台東サテライトオフィスを会場として、7回目の NGO 合同研究＆活動報告会を開催しました。

毎年書いていますが、共催している「内モンゴル沙漠化防止植林の会」と「地球緑化クラブ」の方々と会うことは僕にとって大きな喜びです。基本の考え方、志を共有している居心地の良さを感じます。それに加え、今回は、昨年の秋に GNC のツアーに森林の専門家として同行してくれ、その後 GNC のスタッフとなった尾上さんと再会できたことも大きな喜びでした。彼は普段京都に住んでいますが、当日報告会の基調講演のために出てきてくれ、終了後の打ち上げにも参加しました。話が弾み過ぎ、日帰りの予定を変更し翌朝新幹線で帰ることになりました。また、昨年のハワリンバヤル（モンゴルの春祭りイベント：練馬区光が丘公園）ではじめて会って話をした早稲田大学 1 年の鹿野さんが思いがけず参加してくれ感激しました（彼女は終了後の打ち上げにも参加してくれました）。

基調講演、各団体の報告を通して、ひとつ共通にいえることは、「経済発展とともに内モンゴル、モンゴル国ともに社会的には悪い方向に向かっている」「土地所有をめぐる問題、貧富の格差の問題、エネルギー資源問題などに対して危機感を持って手を打っていかなければならない。」ということです。講演者の一人、エルデニさんは、エネルギー開発問題と沙漠化の関連性について衛星データを用いて分析し、その危険性について警鐘を鳴らしました。尾上さんは、人工林造成の可能性について、モンゴル国の森林生態に関する多数のデータにもとづいて分析しました。

各団体はこれらの問題を解決するために以下のような共通のキーワード、すなわち「現地の人々が自ら動き出した」「ビジネスとして成立させる」「企業とのコラボレーション」「教育の重要性」をめぐる活動を、不思議なことに同時期に同じようにスタートさせているということも今回の活動報告からわかりました。1 年後各団体がどれだけの成果をあげて再び集まることができるのか、今から楽しみです。

【懇親会】
合同研究＆活動報告会の終了後、恒例の懇親会が会場近くの居酒屋で行われました。この居酒屋の特製もつ煮こみと白ホッピーはおすすめです。しかも全品 300 円の安さ！ 皆、ビール、白ホッピーなどを飲みながら、各団体の活動裏話、エピソードに花が咲きました。6 時半にスタートしましたが、楽しい時間はあっという間に過ぎ、皆、終電を気にしながらあわてて駅に向かいました。

（写真：懇親会の様子）

左　矢野　明子さん（GNC）
中　鹿野　詩織さん（早稲田大学 1 年）
右　増田　尚子さん（内モンゴル沙漠化防止植林の会）